

ヘルスプロモーション実習を通じた アクティブラーニングによる学び

研究員：田中笑子、中板育美、橋本結花、山本摶子、
館祥平、青木恭子、古屋千晶、
小熊亜希子、清水なつ美、
小林幹紘、長沼幸司



現代社会においては、疾病構造や社会状況の変化に伴い、すべての人が生涯を通じて健やかで幸せな生活を送ることのできる社会環境の整備が強く求められています。その実現には、地域住民や関係機関とともに地域を創り上げる「協働」の姿勢が不可欠であり、看護職には、地域で暮らす人々の思いや背景を丁寧に汲み取りながら、創造的かつ実践的にケアを展開する力が求められています。本学看護学部では、対象者を全人的に捉える視点を重視し、「生老病死」のすべてのライフステージと多様な健康状態の人々を対象とした看護教育を展開しています。そして、ヘルスプロモーションの考え方に基づき、講義・演習・実習を効果的に組合せ、地域社会のさまざまな現場において、学生が実践的な学びを深める機会を設けています。

本研究では、ヘルスプロモーション実習を通じた「響学スパイラル（共に響き合いながら学びを深める過程）」による学

びの特徴を明らかにすることを目的とし、地域の実践機関と協働して、実習を通して生じた学生、教員、実習機関それぞれの変化や気づきを整理しました。学生は、企業や福祉施設での実習を通して、健康維持・増進に関する多面的な視点や問い合わせ立てる力を養い、地域住民や他の学生と協働しながら主体的に解を模索するアクティブラーニングの様相が確認されました。

一方、実習を受け入れた企業は、健康経営や職場のメンタルヘルスの重要性に改めて気づく機会となり、福祉施設では、利用者の自己理解や自立促進、社会的つながりの構築による健康への好影響を実感するなど、実習がヘルスプロモーションの実体験として機能していました。このように、本学の実習は、学生・教員・実習機関が相互に学び合う「共創の場」としての意義を持ち、看護基礎教育における新たな可能性を示しています。2024年8月には、日本看護学教育学会において大学教員、企業、福祉施設の三者が参加する交流セッションを開催し、全国から集まった60名を超える看護教育関係者とともに、実習による学びの共有と議論を行いました。今後も関係機関との連携を強化し学びの深化と持続的な教育実践の発展を目指します。